

県立高等学校将来構想審議会における テーマ別発言要旨（第1～5回）

- 1 育成すべき人材／培うべき能力について
- 2 高校教育システム／高校教育の目標について
- 3 キャリア教育／職業観・勤労観について
- 4 高校選択について
- 5 学力／大学進学等について
- 6 中高一貫教育について
- 7 普通科について
- 8 専門学科について
- 9 総合学科について
- 10 再編廃合の考え方について
- 11 地域／家庭／企業等との連携について
- 12 学校経営について

育成すべき人材／培うべき能力について

発言要旨	発言委員名	審議会
どういふ人材が必要とされるのかを踏まえて、教育を考えるべき。	白幡（洋）委員	第1回
これから10年間の高齢化社会へのシフトにあたり、どんな人材育成が高校教育で必要なのか考えるべき。	朴澤委員	第4回
高校卒業すれば自立できる。それが社会の責任であり、そういう高校の在り方を目指すべき。	渡辺委員	第1回
豊かな人間性、社会性の育成という高校教育の本質的な狙いについて言及すべき。	高橋委員	第3回
人間力ですか、学力やスキルのみにとらわれない人間としての総合的な能力というのは非常にいい表現。	公平委員	第3回
それぞれの人間の能力を活かし、すべての県民の生活水準を豊かにするために、経済成長を支える人材育成を高校教育の中で考える必要があると思う。	尾崎委員	第2回
地域愛の醸成みたいな話があるといいのかなと。宮城県で学び、出て行っても、いずれは宮城県に戻ってきたいというふうな人がぜひ増えてほしい。	西山委員	第3回
これからの社会を担っていく高校生には、もっと大きな志のようなものを掲げていくべきであり、言わば宮城県という郷土を愛して、その郷土を誇りに思うような人材の育成といったようなことがまず基本。	小澤委員	第3回
高校卒業認定試験の導入が検討されている時代。そういう意味で、基礎学力や学び意欲の問題についても、きちんと形を示すことが必要。	菅野副会長	第1回
50%が志願すれば50%が進学するような現役の大学進学率を高めたい。できれば国立大学の地元出身者率を増やしたい。	白幡（洋）委員	第2回
高卒と大卒の社会のニーズはそれぞれ違うのでそれを踏まえながら高校のあるべき姿を考える必要がある。	渡辺委員	第4回
専門的な分野で子どもたちの能力を最大限に引き出せるような高校の在り方を考えていくという必要があるのではないか。	渡辺委員	第3回
農業を取り巻く状況が大きく変わってきている。集落営農化が進んでいく中で農業離れが進んでいる。現場で感じることはリーダーが育っていない。	佐藤委員	第2回
工業高校は企業誘致や産業人材育成といった県の産業施策に呼应しながら、さまざまな事業に取り組んでいる。	尾崎委員	第2回
高校の3年間で介護福祉士の資格取得が可能となり、高校生と大学生が同じ条件で資格取得の試験を受けることとなる。公立高校として、今後10年間の動きを考えて学科として検討すべきではないだろうか。	朴澤委員	第4回
普通科も含めて、将来のキャリアを作っていくかを、幅広い土台作りのカリキュラムの中に入れていく必要がある。	菅野副会長	第2回
高校生の職場体験を受け入れ、アルバイトも使っているが、コミュニケーション能力という部分では難しい課題を抱えている子がいると感じている。	木村委員	第1回
高卒できちんと教育された人材が社会にでてくるのであれば、安定した雇用にもできる。普通科の中での就職希望者も多いのであれば、普通科の中で実践的な教育について前向きに考えていただきたい。	木村委員	第2回

高校教育システム／高校教育の目標について

発言要旨	発言委員名	審議会
学校や大学との連携、つながりの中での高校の在り方を考えていかなければならない。	白幡（洋）委員	第1回
高等教育と義務教育の間にあるのが高校教育であり、義務教育の延長という考え方でいいのか、高等教育の前におかれる位置づけであるのか。義務教育はある程度、確実性と共通性が考えとしてありえるが、高等教育で求められている機能分化の前置期間と考えるとそういうことを考えなくてはならない。義務教育の延長か、機能分化なのか、もっと仕組みの部分から将来の高校づくりを考えていくべきだと思う。	朴澤委員	第2回
いかに高校システムを超えるか。宮城県の中だけ、高校の中だけで考えては、将来構想を語れない。	荒井会長	第1回
高校というものは果たして中学との連携の上で考えるべきなのか、あるいは大学との連携を念頭に置いて考えるのか、それによって随分、高校教育というものの位置づけが変わってくる。高校教育は、義務教育と高等教育の間に挟まって、高校教育というものが独自の存在たり得るのか。	荒井会長	第3回
高校選択にあたって学力の問題、大学進学の問題は支配的である。この問題をどういうふうに捉えるか。高校教育を大学とのつながりで考えるのか、中学の積み上げで考えるのかで別れてくる。	荒井会長	第4回
宮城県の場合、高卒の22%が専門学校に進学している中で、職業教育を高校で閉じるのかを検討しておく必要がある。教育システムの中で、高校と専門学校との接続を考えていく必要がある。	荒井会長	第4回
高校全入が社会的に認知されていることを踏まえれば、「機会均等」という理念も大事。	本図委員	第1回
子どもは高校を選ぶ段階で、まだ商業なのか工業なのか、まだ自分自身ではっきりしていない。子どもたちがゆっくりと考えながら、ゆっくり学びながら、高校生活の中で決定して進むという、そういうゆっくり学ぶ場が保障されてもいいのではないかとこのように考える。	高橋委員	第3回
義務教育の延長と思っている生徒や保護者が非常に増えている。義務教育の延長ではない、行きたい高校は競争してでも行かなければならないといった表現がどこかに入られないのか。	公平委員	第3回
高校卒業認定試験の導入が検討されている時代。そういう意味で、基礎学力や学ぶ意欲の問題についても、きちんと形を示すことが必要。	菅野副会長	第1回
高校卒業すれば自立できる。それが社会の責任であり、そういう高校の在り方を目指すべき。	渡辺委員	第1回
高卒と大卒の社会のニーズはそれぞれ違うのでそれを踏まえながら高校のあるべき姿を考える必要がある。	渡辺委員	第4回
専門的な分野で子どもたちの能力を最大限に引き出せるような高校の在り方を考えていくという必要があるのではないかと。	渡辺委員	第3回
職業教育だけでなく、高校卒業後、広いスパンで自分のキャリア形成に関して、どういう情報を持っていて、それについてどういう実現可能性があって、どの程度の努力をすればよいかをイメージできるようなものを高校教育の中にかなりキチンと入れて行かなくてはならないと思う。	菅野副会長	第2回
大学進学意図が希薄化する中で、高等学校の職業教育もしっかり考えるべきである。	尾崎委員	第4回
進学率も就職率もあがったが、個人一人一人を見たときに、その中での子供たちがいきいきしているだろうか。勉強が大きな比重を占める一方で部活がおろそかになっていないだろうか。子供たちは大学進学だけ、就職だけを考えて高校に行くわけではない。そういうものを乗り越えるような学校を作っていくって欲しい。	白幡（勝）委員	第2回
進学率がほぼ100%になる中で、ある年齢層の育ち方がある意味画一的になっている。そうした中で擬似的な形で多様化というものをもち込むのが本当にいいのかという感じがしている。これまでの改革は、実は文部科学省の煽りを受けて各県がこういうことをやっていますと整理されているのが実態。	朴澤委員	第2回
高校教育は多様性の中にある。その中で、生徒の生きる力、自己実現、進路の実現が達成されるような基本方針づくりができればありがたい。	北島委員	第1回
多様化をつくり過ぎているのではないかと。多様化でいろんな学科を設けたが、いっばいつくったがためにかえて中途半端にしているのではないかと。本当に生徒が多様化を望んでいるのか。	白幡（洋）委員	第3回
どういう人材が必要とされるのかを踏まえて、教育を考えるべき。	白幡（洋）委員	第1回
これから10年間の高齢化社会へのシフトにあたり、どんな人材育成が高校教育で必要なのか考えるべき。	朴澤委員	第4回
これからの社会を担っていく高校生には、もっと大きな志のようなものを掲げていくべきであり、言わば宮城県という郷土を愛して、その郷土を誇りに思うような人材の育成といったようなことがまず基本。	小澤委員	第3回
今の子どもたちは、残念なことに夢や希望が以前と比べるとかなり少ない。	井口委員	第3回
人間力ですか、学力やスキルのみにとらわれない人間としての総合的な能力というのは非常にいい表現。	公平委員	第3回
豊かな人間性、社会性の育成という高校教育の本質的な狙いについて言及すべき。	高橋委員	第3回
いろいろな選択ができるようにいち早く夢や希望をもって目標を設定することが一番大切。そういう現場に合った対応力、応用力を使えるような人材が望まれるのではないかと。	渡辺委員	第3回
それぞれの人間の能力を活かし、すべての県民の生活水準を豊かにするために、経済成長を支える人材育成を高校教育の中で考える必要があると思う。	尾崎委員	第2回

キャリア教育／職業観・勤労観について

発言要旨	発言委員名	審議会
今は、高校進学時に将来の職業を見越して進学しているのではないと感じた。	公平委員	第1回
今の子どもたちは、残念なことに夢や希望が以前と比べるとかなり少ない。	井口委員	第3回
最近の高校生は、将来の目標目的を持っていないということが一番気になるところ。	渡辺委員	第3回
子どもは高校を選ぶ段階で、まだ商業なのか工業なのか、まだ自分自身ではっきりしていない。子どもたちがゆっくりに考えながら、ゆっくりに学びながら、高校生活の中で決定して進むという、そういうゆっくりに学ぶ場が保障されてもいいのではないかとこのように考える。	高橋委員	第3回
いろいろな選択ができるようにいち早く夢や希望をもって目標を設定することが一番大切。そういう現場に合った対応力、応用力をさせるような人材が望まれるのではないかと。	渡辺委員	第3回
高校教育は多様性の中にある。その中で、生徒の生きる力、自己実現、進路の実現が達成されるような基本方針づくりができればありがたい。	北島委員	第1回
学校、先生方には、生徒とのコミュニケーションをとりながら、将来何になりたいか、どういう方向に行ったらいいかというような、そういうサポートをして欲しい。	猪股委員	第3回
キーワードとしてキャリア教育が重要だと思った。	菅野副会長	第2回
魅力的な学校をどうつくっていくのか。キャリア教育の充実による全ての子供への有能感の付与と、教師の力量アップをどう考えていくか、の2つの視点が重要。	本図委員	第1回
普通科卒で就職する場合、普通科における職業教育、キャリアプランはどのようにやっていくのかということを考えていかなくてはならない。	白幡（洋）委員	第2回
高卒で就職した5、600人のうち、普通科卒が占める割合が44%という現実があるが、労働市場で不利な扱いを受ける高卒者の中でも、特に普通科で職業教育がなされない場合は、著しく不安定な若年者労働市場に向かわなければならないことになる。	尾崎委員	第2回
高卒できちんと教育された人材が社会にでてくるのであれば、安定した雇用にもできる。普通科の中での就職希望者も多いのであれば、普通科の中で実践的な教育について前向きに考えていただきたい。	木村委員	第2回
離職753現象の5と言う数字の中で、工業と商業、普通科と分けた場合、常識的に考えて普通科の方が離職率が高いと思うが、そういった詳細なデータ分析から普通科における職業教育をどうするかを検討することは喫緊の課題である。	白幡（洋）委員	第2回
普通科も含めて、将来のキャリアを作っていくかを、幅広い土台作りのカリキュラムの中に入れていく必要がある。	菅野副会長	第2回
いくら学習しても応用力を身に付けていないと、社会に出てから役に立たないことから、インターンシップで職場体験をしたり、いろいろなイベントに参加協力するなど、応用力を身に付ける活動を積極的にすることが重要だと思う。	渡辺委員	第3回
職場体験は応用力を考える上でも、非常に必要だと思う。そういうことは積極的にカリキュラムの中に入れていく必要がある。	渡辺委員	第4回
高校生の職場体験を受け入れ、アルバイトも使っているが、コミュニケーション能力という部分では難しい課題を抱えている子がいると感じている。	木村委員	第1回
ソニーセミコンダクタや東北リコーなど地域の企業を高校教育に取り込んでいくようなことも。	西山委員	第5回
大学進学意図が希薄化する中で、高等学校の職業教育もしっかり考えるべきである。	尾崎委員	第4回
総合学科の就職内定率は決して高くない。職業教育をしていたとしても、それは十分産業界のニーズに答えられていないと捉えている。	尾崎委員	第4回
職業教育だけでなく、高校卒業後、広いスパンで自分のキャリア形成に関して、どういう情報を持っていて、それについてどういう実現可能性があって、どの程度の努力をすればできるのかをイメージできるようなものを高校教育の中にかなりキチンと入れて行かなくてはならないと思	菅野副会長	第2回
宮城県の場合、高卒の22%が専門学校に進学している中で、職業教育を高校で閉じるのかを検討しておく必要がある。教育システムの中で、高校と専門学校との接続を考えていく必要がある	荒井会長	第4回
同じ地区内の普通科高校をみると、明らかに学力や卒業後の進路に差があるにも関わらず、同じ学習内容の普通教育をして良いのだろうか。進路もいろいろあるので、教科が一定なことを見直す必要があるのではないかと。	木村委員	第4回
女子の就職先の開拓も強くやっていただきたい。職業情報提供の充実として、徹底した進路指導を加えていただきたい。	木村委員	第3回
高卒の離職率が高いというのが話題になる。学校だけの問題ではなく、家庭の問題でもあると思う。	阿部委員	第1回
高校卒業後、昔は普通科が進学、それ以外は就職となっていたが、現在は必ずしもそうではない。中卒段階で自分の将来を決められない人に対しては中高一貫校というのは、何らかの解決手段になるのではないかと。	白幡（洋）委員	第2回

高校選択について

発言要旨	発言委員名	審議会
高校選択において学力が非常に重視されていることが分かった。	西山委員	第4回
高校選択にあたって学力の問題、大学進学の問題は支配的である。この問題をどういうふうに捉えるか。高校教育を大学とのつながりで考えるのか、中学の積み上げで考えるのかで別れてく	荒井会長	第4回
ズ 子供は、通える高校を選択しているのが現状。	佐々木委員	第1回
子供たちのニーズは1時間以内のところにも多様な学びを欲しており、新たな学校をつくるのはなかなか難しいので、宮城県においては、複合系の在り方を模索すべきではないかと思う。	北島委員	第4回
今は、高校進学時に将来の職業を見越して進学しているのではないと感じた。	公平委員	第1回
新幹線などない明治の時代でも、学び気持ちがあれば全国から生徒が集まってくる、そんな時代があった。	朴澤委員	第2回
中学生が本当に入りたい高校が明確になりにくいのではないか。高校の違いは、点数以外では明確ではないのではないかと。全県一学区化に向けた各学校の情報発信の積極的展開等を通し、中学生の高校進学の意味づけが必要。	井口委員	第4回
子どもは高校を選ぶ段階で、まだ商業なのか工業なのか、まだ自分自身ではっきりしていない。子どもたちがゆっくりと考えながら、ゆっくり学びながら、高校生活の中で決定して進むという、そういうゆっくり学ぶ場が保障されてもいいのではないかとというふうに考える。	高橋委員	第3回
親として、子供にとって、魅力ある＝入りたい、学ばせたい学校は、どうやってつくるか考えていきたい。地元においても、高いレベルで学びながら、よい人生が送れる、そういった教育環境の整備が重要と思う。	佐藤委員	第1回
子供の希望よりも親の期待が大きい。社会の経済状況がどの学校までの教育を必要とするかの需要を左右する。	荒井会長	第4回
親と子供の選択のずれ、家計が子供の選択を拘束している。世帯主との進学選択との関係、世帯主が第3次産業に従事する高学歴へのシフトが生じる。産業構造の変化に依存するか。	荒井会長	第4回
義務教育の延長と思っている生徒や保護者が非常に増えている。義務教育の延長ではない、行きたい高校は競争してでも行かなければならないといった表現がどこかに入れられないのか。	公平委員	第3回
アンケートでは、県民や保護者が総合学科を増やすべきとする一方、総合学科の生徒は別の学科への進学希望を持っていることを見ると、総合学科に通っている生徒自体は総合学科の中身をつかみ切れていないのではないかと。	朴澤委員	第4回
子供たちは進学のためだけに普通科に入っている訳ではなく、純粋に就職とか考えずに勉強してみたいという理由で入っている子供もかなり含まれているのではないかと。そう考えれば、普通科に進学した子供たちが進学しないことを一概にマイナスに捉える必要はない。	白幡（勝）委員	第2回
生徒の様々なニーズに対応する必要があることからすれば、すべての学区にいろいろな高校をつくるのは無理なので学区撤廃というはよかったのではないかと。	西山委員	第4回
高校にも農業関係の科はあるが、募集の倍率や、実際入っている人材はどうなっているかというところ、本当に農業をやりたいという人材は一握りの僅かなのではないかと。	佐藤委員	第2回
農業高校には、「入れる学校」として入学する生徒が多い傾向になっている。一方で、本来農業高校が果たさなければならぬ役割もあり、それを分けて指導していかないと全部ダメになってしまう、そういうギリギリのところで行っている状況。	早坂委員	第4回
農業高校には、学力が低い子供や不登校だった子供、学習障害を持った子供などが現実的に進学してきているが、栽培飼育に携わり、生命体を扱っていく中で人格形成している現状など、農業教育の持つ多様性などを発揮しながら、今後の教育の在り方を探っていきたい。	早坂委員	第1回
最近の高校生は、将来の目標目的を持っていないということが一番気になるところ。	渡辺委員	第3回
進学したい生徒は切磋琢磨できるいい高校を志望し、スポーツで活躍したい生徒は環境のいい高校を目指すと思うので、学区制をなくしたことで生徒の集中が起こるような気がする。そこにどう歯止めをしていくかが県教委の腕の見せ所だと思う。	猪股委員	第5回
スポーツ面や職業を意識した高校づくりにも目を向ける必要があると思う。たとえ小規模校になったとしても、子供達を呼べる高校づくりが必要。	公平委員	第1回
高校卒業後、昔は普通科が進学、それ以外は就職となっていたが、現在は必ずしもそうではない。中卒段階で自分の将来を決められない人に対しては中高一貫校というのは、何らかの解決手段になるのではないかと。	白幡（洋）委員	第2回
拠点校は心配ないが、それ以外の高校の特色づくりが問題なのではないかと。	佐々木委員	第5回

学力／大学進学等について

発言要旨	発言委員名	審議会
高校選択にあたって学力の問題、大学進学の問題は支配的である。この問題をどういうふうに捉えるか。高校教育を大学とのつながりで考えるのか、中学の積み上げで考えるのかで別れてくる。	荒井会長	第4回
進学とか、学力の向上というのは無視できない課題。	西山委員	第3回
大学進学率も大事だが、高校として本来どうあるべきかを考えたい。	井口委員	第4回
高校卒業認定試験の導入が検討されている時代。そういう意味で、基礎学力や学ぶ意欲の問題についても、きちんと形を示すことが必要。	菅野副会長	第1回
県立高校の分かりやすいコンセプト、例えば「学力」「社会性」といったことを立て実践してはどうか。	西山委員	第1回
宮城の大学進学率の低さは、基礎的な学力、学ぶ意欲や姿勢に関連しているのではないか。	菅野副会長	第1回
宮城県は現役進学率が全国平均に比べて低い。進学や学力だけが全てではないが、重要な要素の一つの柱として、全国平均を目標にすべきと思う。	西山委員	第2回
人間力ですか、学力やスキルのみにとらわれない人間としての総合的な能力というのは非常にいい表現。	公平委員	第3回
進学率も就職率もあがったが、個人一人一人を見たときに、その中での子供たちがいきいきしているだろうか。勉強が大きな比重を占める一方で部活がおろそかになっていないだろうか。子供たちは大学進学だけ、就職だけを考えて高校に行くわけではない。そういうものを乗り越えるような学校を作っていって欲しい。	白幡（勝）委員	第2回
子供たちは進学のためだけに普通科に入ってる訳ではなく、純粋に就職とか考えずに勉強してみたいという理由で入っている子供もかなり含まれているのではないか。そう考えれば、普通科に進学した子供たちが進学しないことを一概にマイナスに捉える必要はない。	白幡（勝）委員	第2回
同じ地区内の普通科高校をみると、明らかに学力や卒業後の進路に差があるにも関わらず、同じ学習内容の普通教育をして良いのだろうか。進路もいろいろあるので、教科が一定なことを見直す必要があるのではないか。	木村委員	第4回
子供の希望よりも親の期待が大きい。社会の経済状況がどの学校までの教育を必要とするかの需要を左右する。	荒井会長	第4回
親と子供の選択のずれ、家計が子供の選択を拘束している。世帯主との進学選択との関係、世帯主が第3次産業に従事する高学歴へのシフトが生じる。産業構造の変化に依存するか。	荒井会長	第4回
今の高校生に夢や希望もあるのか。経済的な理由で大学に行けない生徒がたくさん出てきたことに対して、社会や行政がどう応えていくのが、10年先を考えた場合、非常に大きな課題になる。	白幡（洋）委員	第3回
アンケート調査では、高校を最終学歴と考えている子供のうち、家計の状況を理由にしている生徒が20%近くいる。学力が高いにも関わらず、経済的な問題で進学をあきらめている生徒がこの20%に入っているのであれば、奨学金等の活用方法などを議論すべき。	西山委員	第4回
50%が志願すれば50%が進学するような現役の大学進学率を高めたい。できれば国立大学の地元出身者率を増やしたい。	白幡（洋）委員	第2回
地元の国立系の大学に入っただいて、地元の研究開発に携わっていただくことが、家庭にとっても本人にとってもハッピーなのではないか。	白幡（洋）委員	第2回
仙台市内の進学校だけでなく、各拠点校からも東北大学を志望してもらい、卒業生が地元に着し、仕事場も確保していく地域づくりが必要。	菅野副会長	第2回
高卒と大卒の社会のニーズはそれぞれ違うのでそれを踏まえながら高校のあるべき姿を考える必要がある。	渡辺委員	第4回
大学進学意図が希薄化する中で、高等学校の職業教育もしっかり考えるべきである。	尾崎委員	第4回
必ずしも進学だけを考えて高校に行くわけではないので、中高大の一つの流れの中で、社会の人材を活用しながら幅広く育てていく必要があるのではないか。	白幡（勝）委員	第2回
私立の高校では、普通科の中にも特別進学コースのような学力別のクラス分けがある。公立高校でも普通科の中にクラス分けがあればよい。	佐藤委員	第5回
大卒あるいは大学院卒の人が地元に残れるような産業構造を作ることが、今後避けて通れないと思う。今後、東北地域が中国、東南アジア、韓国などと競争していく上で、大卒者が生き生きと働ける職場が地元にあることが重要であると思っている。	西山委員	第2回

中高一貫教育について

発言要旨	発言委員名	審議会
これまで中高一貫に取り組んできた2地区でどういう成果が現れたのか詳しく聞きたい。	木村委員	第2回
中学校の指導主事が中高一貫になぜ賛成しないのか。その中に何か理由があるのではないかと。保護者に人気があるにも関わらず、増やす必要性を感じていない先生の意見を知りたい。	佐藤委員	第4回
中高一貫教育について、中学校教員は中高一貫校の入試に関わっていないため、よく理解していない面がある。	高橋委員	第5回
中高一貫については古川黎明中も仙台青陵中も、国公立大への進学率に数値目標を掲げることにか点をあげていることが書いてあった。	佐藤委員	第4回
地域の中学校でリーダーとなるべき各小学校の優秀な子どもが中高一貫校に集約されているなど、周辺の中学への影響も大きい。	高橋委員	第5回
東北の中には、外進生が定員割れを起こしている中高一貫校もあり、何のための中高一貫かという感じにもなっている。	荒井会長	第4回
中高一貫校の古川黎明高校は、15歳に受験勉強しなくて済んだことから、1年生が高校総体で活躍している。中高一貫校は、子供たちの健康という面で良いのではないだろうか。	公平委員	第4回
中高一貫は、15の春が無いという連続性のポジティブな評価もあるが、進学にシフトすると早回しでカリキュラムを終えてしまい受験対策を取る都心の私学のスタイルが出てくる可能性がある。	菅野副会長	第4回
中高一貫校の出現により、保護者の小学校の評価が非常に厳しくなっている。保護者の通信簿への見る目が厳しくなり、教員サイドへのプレッシャーとなっている。今まで一つの学校で完結していた問題が、学校間の問題に拡大している状況。	菅野副会長	第4回
高校入試に際して中学校が抱えていた評価の統一性の問題が、小学校に降りてきているなど、小学校の先生たちが厳しい状況に直面しており、中高一貫校の導入の副次的なインパクトを与えるのではないかと見ている。	菅野副会長	第4回
中高一貫校が多くできて、中学生を取り合うことは望ましいことではない。ある人口規模以上のところでやるのが妥当である。	高橋委員	第5回
中高一貫教育の中で自分の進路、あるいは自分のスキルを磨いていくことができるのではないかと。	白幡（洋）委員	第3回
高校卒業後、昔は普通科が進学、それ以外は就職となっていたが、現在は必ずしもそうではない。中卒段階で自分の将来を決められない人に対しては中高一貫校というのは、何らかの解決手段になるのではないかと。	白幡（洋）委員	第2回
学校を統合していくのであれば、中高一貫校がよく、中高一貫校なら総合学科がいいと思う。進学を目指すコース、工業系のコース、商業系のコースがあり、場合によっては途中から工業高校、商業高校、高専への進路変更ができるような多様な仕組みがあるといい。学校として寮を完備すれば、生活習慣なども含めて指導できるのではないかと。	白幡（洋）委員	第5回
総合学科の3年間で普通教育も専門教育も習得するのは難しいので、総合学科高校こそ、中高一貫校化すべきではないか。6年間で専門科目も必修科目もきちっと学ぶことが生徒たちに良いのではないかと思う。	白幡（洋）委員	第4回
総合学科の学校は、専門学科に比べて設備が貧弱であるからこそ、中高一貫校化し充実させるべきではないか。	白幡（洋）委員	第4回
総合学科について、例えば4年間やった後に、農業や商業や工業に分かれていくのが良いのではないかと。ある程度のもを身につけたら、より設備の整った学校や先生の元で専門を学んでいけるよう、学校を移っていくという組み合わせもありではないか。	白幡（洋）委員	第4回
スポーツや芸術に特化した中高一貫校はどうか。	木村委員	第5回

普通科について

発言要旨	発言委員名	審議会
普通科の在り方について、宮城県は普通科の進学する割合が少ないが、何故子供たちが普通科に入っているかをよく考える必要がある。	白幡（勝）委員	第2回
子供たちは進学のためだけに普通科に入っている訳ではなく、純粋に就職とか考えずに勉強してみたいという理由で入っている子供もかなり含まれているのではないかと。そう考えれば、普通科に進学した子供たちが進学しないことを一概にマイナスに捉える必要はない。	白幡（勝）委員	第2回
子どもは高校を選ぶ段階で、まだ商業なのか工業なのか、まだ自分自身ではっきりしていない。子どもたちがゆっくりと考えながら、ゆっくり学びながら、高校生活の中で決定して進むという、そういうゆっくり学ぶ場が保障されてもいいのではないかとこのように考える。	高橋委員	第3回
高校教育の在り方として、現在のように職業教育と普通教育のそれぞれで進んでいき、それを高等教育で統合されるということが望ましいのか、総合学科も一つの形として考えられるが、総合学科以外の可能性は考えられないのか。	荒井会長	第4回
高卒で就職した5,600人のうち、普通科卒が占める割合が44%という現実があるが、労働市場で不利な扱いを受ける高卒者の中でも、特に普通科で職業教育がなされない場合は、著しく不安定な若年者労働市場に向かわなければならないことになる。	尾崎委員	第2回
離職753現象の5と言う数字の中で、工業と商業、普通科と分けた場合、常識的に考えて普通科の方が離職率が高いと思うが、そういった詳細なデータ分析から普通科における職業教育をどうするかを検討することは喫緊の課題である。	白幡（洋）委員	第2回
普通科高校は、普通教育だけ行っているわけではなく、職業系の選択科目を持っている学校生徒もある。また専門高校でも普通教育があり、もう少し一つの学校の中に多くの学科がある複合的な形の学校を増やした方がよいのではないかと。	北島委員	第4回
普通科卒で就職する場合、普通科における職業教育、キャリアプランはどのようにやっていくのかということを考えていかななくてはならない。	白幡（洋）委員	第2回
普通科も含めて、将来のキャリアを作っていくかを、幅広い土台作りのカリキュラムの中に入れていく必要がある。	菅野副会長	第2回
同じ地区内の普通科高校をみると、明らかに学力や卒業後の進路に差があるにも関わらず、同じ学習内容の普通教育をして良いのだろうか。進路もいろいろあるので、教科が一定なことを見直す必要があるのではないかと。	木村委員	第4回
宮城県は他県に比べて普通科が多い。アンケートの結果では工業系に希望する生徒が多く、センทรัล自動車をはじめ、自動車産業に関する就職が増えることから、自動車関連の技術を養うような学校を増やしていく必要があるのではないかと。	木村委員	第4回
宮城県の場合、高卒の22%が専門学校に進学している中で、職業教育を高校で閉じるのかを検討しておく必要がある。教育システムの中で、高校と専門学校との接続を考えていく必要がある。	荒井会長	第4回
高校卒業後、昔は普通科が進学、それ以外は就職となっていたが、現在は必ずしもそうではない。中卒段階で自分の将来を決められない人に対しては中高一貫校というのは、何らかの解決手段になるのではないかと。	白幡（洋）委員	第2回
私立の高校では、普通科の中にも特別進学コースのような学力別のクラス分けがある。公立高校でも普通科の中にクラス分けがあればよい。	佐藤委員	第5回

専門学科について

発言要旨	発言委員名	審議会
専門的な分野で子どもたちの能力を最大限に引き出せるような高校の在り方を考えていくという必要があるのではないか。	渡辺委員	第3回
多様化をつくり過ぎているのではないかと。多様化でいろんな学科を設けたが、いっばいつくったがためにかえって中途半端にしているのではないかと。本当に生徒が多様化を望んでいるのかどうか。	白幡（洋）委員	第3回
生徒の様々なニーズに対応する必要があることからすれば、すべての学区にいろいろな高校をつくるのは無理なので学区撤廃というはよかったのではないかと。	西山委員	第4回
これから10年間の高齢化社会へのシフトにあたり、どんな人材育成が高校教育で必要なのか考えるべき。	朴澤委員	第4回
職業教育から大学進学に重心が移行するかのように見えるが、細かく見ていく必要がある。1992年と2005年との比較で、大学入学志願者が全体の70.9%に減少する中で工学部の志願者が56.2%と工学部離れが進んでいる。このことから、工業における職業教育がすぐに高等教育にシフトするとは見えにくいことが見てとれる。	尾崎委員	第4回
宮城県の場合、高卒の22%が専門学校に進学している中で、職業教育を高校で閉じるのかを検討しておく必要がある。教育システムの中で、高校と専門学校との接続を考えていく必要がある。	荒井会長	第4回
高校にも農業関係の科はあるが、募集の倍率や、実際入っている人材はどうなっているかというところ、本当に農業をやりたいという人材は一握りの僅かなのではないかと。	佐藤委員	第2回
農業高校には、「入れる学校」として入学する生徒が多い傾向になっている。一方で、本来農業高校が果たさなければならない役割もあり、それを分けて指導していかないと全部ダメになってしまう、そういうギリギリのところできている状況。	早坂委員	第4回
農業高校には、学力が低い子供や不登校だった子供、学習障害を持った子供などが現実的に進学してきているが、栽培飼育に携わり、生命体を扱っていく中で人格形成している現状など、農業教育の持つ多様性などを発揮しながら、今後の教育の在り方を探していきたい。	早坂委員	第1回
農業を取り巻く状況が大きく変わってきている。集落営農化が進んでいく中で農業離れが進んでいる。現場で感じることはリーダーが育っていない。	佐藤委員	第2回
集落営農、法人化が進む中で、経営能力やマーケティング能力、人を使うこと等さまざまな能力が必要になってくるが、その方面が手薄ではないかと。	佐藤委員	第2回
公立の高校だからこそ、リスクを負いながらも特色を持って地域に生きるような学校ができるのではないかと。そういう意味で県内全域のバランスをとりながら、地域における小規模校や特色ある学校の存続や改善をして、よい学校にするようなそういう方向も打ち出していく必要がある。生徒減少イコール統合廃止ではないという方向性を示すべき。	高橋委員	第3回
観光・サービス科とか、フードビジネス科など大学で設定されている専門教育ではあるが、経済的な理由で大学進学が叶わない場合も多いので、高校の専門教育の中で時代のニーズにマッチした学科を設定いただきたい。	木村委員	第2回
高校の3年間で介護福祉士の資格取得が可能となり、高校生と大学生が同じ条件で資格取得の試験を受けることとなる。公立高校として、今後10年間の動きを考えて学科として検討すべきではないだろうか。	朴澤委員	第4回
スポーツや芸術に特化した中高一貫校はどうか。	木村委員	第5回
工業高校は企業誘致や産業人材育成といった県の産業施策に呼应しながら、さまざまな事業に取り組んでいる。	尾崎委員	第2回
ソニーセミコンダクタや東北リコーなど地域の企業を高校教育に取り込んでいくようなことも。進出企業からは、地元採用分は、大卒は不要、高卒で十分だとのこと。親としては微妙なところ。	西山委員	第5回
産業競争力に資するものとして、マーケティング戦略や知財戦略に関することを学べる場があるといいと思う。	佐藤委員	第1回
宮城県は他県に比べて普通科が多い。アンケートの結果では工業系に希望する生徒が多く、センทรัล自動車をはじめ、自動車産業に関する就職が増えることから、自動車関連の技術を養うような学校を増やしていく必要があるのではないかと。	西山委員	第5回
普通科高校は、普通教育だけ行っているわけではなく、職業系の選択科目を持っている学校生徒もある。また専門高校でも普通教育があり、もう少し一つの学校の中に多くの学科がある複合的な形の学校を増やした方が良いのではないかと。	木村委員	第4回
普通科高校は、普通教育だけ行っているわけではなく、職業系の選択科目を持っている学校生徒もある。また専門高校でも普通教育があり、もう少し一つの学校の中に多くの学科がある複合的な形の学校を増やした方が良いのではないかと。	北島委員	第4回
子供たちのニーズは1時間以内のところが多様な学びを欲しており、新たな学校をつくるのはなかなか難しいので、宮城県においては、複合系の在り方を模索すべきではないかと思う。	北島委員	第4回
学校を統合していくのであれば、中高一貫校がよく、中高一貫校なら総合学科がいいと思う。進学を目指すコース、工業系のコース、商業系のコースがあり、場合によっては途中から工業高校、商業高校、高専への進路変更ができるような多様な仕組みがあるといい。学校として察を完備すれば、生活習慣なども含めて指導できるのではないかと。	白幡（洋）委員	第5回

総合学科について

発言要旨	発言委員名	審議会
全国の学科構成比をみると、宮城県は、特徴があるわけではないが、広島県や全国平均と比べると、総合学科の生徒数が低い。これをどう考えるか。	西山委員	第4回
意外であったのは、総合学科に対する期待が高いことで驚いた。	白幡（洋）委員	第4回
アンケートでは総合学科を増やすべきという意見が多かったが、総合学科の大学進学率は低い。	白幡（洋）委員	第4回
アンケートでは、県民や保護者が総合学科を増やすべきとする一方、総合学科の生徒は別の学科への進学希望を持っていることを見ると、総合学科に通っている生徒自体は総合学科の中身をつかみ切れていないのではないか。	朴澤委員	第4回
目的意識を持ってつくられた総合学科高校と、職業高校と普通科高校の合併効果を狙ってつくられた総合学科高校があるが、結果的に高校教育の改善につながった高校がどれくらいあったか、それを足し合わせるたのがアンケート調査結果の数字ではないか。	荒井会長	第4回
最初に設置した総合学科は、質の高いものができたが、徐々に質さががってしまっているという話を高校の先生から聞いた。この質をどう維持するのが重要だと思う。	西山委員	第4回
総合学科と聞けば、保護者は「進路の選択肢が広がりそうだ。」と考えてしまうのだが、その辺の先生方と保護者と生徒のギャップを考えることは今後の学校の在り方を考える上で重要ではないか。	佐藤委員	第4回
総合学科の就職内定率は決して高くない。職業教育をしていたとしても、それは十分産業界のニーズに答えられていないと捉えている。	尾崎委員	第4回
総合学科単独の高校と、総合学科と他の学科が併設の高校で違いがあるのではないか。そういう分析も必要ではないか。	朴澤委員	第4回
地元で総合学科の伊具高校があり、就職もいいので、高校を出て就職するのなら、総合学科がいいのではないかとと思う。	渡辺委員	第4回
総合学科は、それぞれ高校が置かれている地域と特色が異なることから一くくりでは語れないと思う。宮城野高校には宮城野の、迫桜高校には迫桜のというように、それぞれ職業系の専門高校に近い、普通科の高校に近いあり方があると思われる。	北島委員	第4回
総合学科は全国でいろいろな作られ方をしているが、総合学科の生徒は、入学してから卒業するまでいろいろな進路にゆらぐものの、結果的には入学時に決めたところに落ち着いている。総合学科が標榜していた進路の柔軟性を達成できていないという調査結果が、4～5年前の調査で出ている。	荒井会長	第4回
理念としての社会的な受けのよさと、実行できる条件が対立している結果だと思う。	荒井会長	第4回
京都南陽高校の「サイエンスカフェ」や八戸高校の「表現科」のように、宮城県の総合学科に特徴を持たせ、人口の社会増につながれば素晴らしい。	西山委員	第5回
学校を統合していくのであれば、中高一貫校がよく、中高一貫校なら総合学科がいいと思う。進学を目指すコース、工業系のコース、商業系のコースがあり、場合によっては途中から工業高校、商業高校、高専への進路変更ができるような多様な仕組みがあるといい。学校として寮を完備すれば、生活習慣なども含めて指導できるのではないか。	白幡（洋）委員	第5回
高校教育の在り方として、現在のように職業教育と普通教育のそれぞれで進んでいき、それを高等教育で統合されるということが望ましいのか、総合学科も一つの形として考えられるが、総合学科以外の可能性は考えられないのか。	荒井会長	第4回

再編廃合の考え方について

発言要旨	発言委員名	審議会
経営的にみれば誰が見ても、生徒数が少ないところは統合しちゃえとなるが、教育はそれだけで割り切れるものでもない。	猪股委員	第1回
統廃合は当たり前だが、その中で学校の特色とか雰囲気とか歴史を生かして生き残りをかけていかななくてはいけない。	猪股委員	第3回
人口数や財政の論理でいけば統合せざるを得ないが、地理的条件や伝統、ニーズなどを踏まえる必要がある。	高橋委員	第1回
適正配置、小規模校の再編はやむを得ない面もあるが、公教育の役割として一律に再編は乱暴である。高校の存在は地域によっては、歴史があり、地域のシンボリックな存在である。住宅政策、企業誘致など、まちづくりの根幹に関わる重要な問題であり、県土づくり全体に関わる問題である。	井口委員	第5回
子供たちのニーズは1時間以内のところにも多様な学びを欲しており、新たな学校をつくるのはなかなか難しいので、宮城県においては、複合系の在り方を模索すべきではないかと思う。	北島委員	第4回
小規模であっても、地域と連携しながら、元気のある学校づくりをやっているところもある。そうした学校の在り方も模索すべき。	高橋委員	第1回
小規模校を統合していくとしても4学級規模の学校が残り、教員の配置が不足し、指導に支障がでる。配慮が必要である。	白幡（勝）委員	第5回
平成32年までに3,000名、70クラスが減少する。宮城北部東部の高校が全て無くなる位の数値であることを考えると、出口からだけでなく、入ってもらえる、見向いてもらえるといった入り口からの視点からも考えて欲しいと思う。	公平委員	第2回
目的意識を持ってつくられた総合学科高校と、職業高校と普通科高校の合併効果を狙ってつくられた総合学科高校があるが、結果的に高校教育の改善につながった高校がどれくらいあったか、それを足し合わせるたのがアンケート調査結果の数字ではないか。	荒井会長	第4回
普通科高校は、普通教育だけ行っているわけではなく、職業系の選択科目を持っている学校生徒もある。また専門高校でも普通教育があり、もう少し一つの学校の中に多くの学科がある複合的な形の学校を増やした方が良いのではないか。	北島委員	第4回
学校を統合していくのであれば、中高一貫校がよく、中高一貫校なら総合学科がいいと思う。進学を目指すコース、工業系のコース、商業系のコースがあり、場合によっては途中から工業高校、商業高校、高専への進路変更ができるような多様な仕組みがあるといい。学校として寮を完備すれば、生活習慣なども含めて指導できるのではないか。	白幡（洋）委員	第5回
分校化はおもしろいコンセプトだと思う。インターネットで接続して質の高い授業を提供するとか。	西山委員	第5回
地域の高校は統廃合の対象となると思うが、分校、校舎制、キャンパス制などで残す方法を検討して欲しい。	公平委員	第5回
県が浦高校と気仙沼高校の統合は、その後の評価も含めて良かったと思っている。	白幡（勝）委員	第1回

地域／家庭／企業等との連携について

発言要旨	発言委員名	審議会
学生の学び力を持ってもらうために、社会が、企業が、家庭が、学校がどう役割分担できるのかということを議論したい。	白幡（洋）委員	第1回
高校に関係する各領域、各セグメントのできることを考えながら進められないか。特に家庭の下支え。	菅野副会長	第1回
少子化の中で、社会や家庭、学校の連携の在り方なども考えていきたい。	渡辺委員	第1回
地域と切り離して、子供達の育成はない。	高橋委員	第1回
地域の人を支える地域の学校といったことを考えていかなければならない。	佐々木委員	第1回
高校が地域に何ができるのかといったことも考えていく必要。	小澤委員	第1回
人口減少の中で、20年、30年先を考えた時、地域の高等学校の存在が本当に大きい。単に勉強とか部活動だけではなく、地域との協働とか地域に対して何ができるかなど、もっと地域に根差した高校教育を進めていくべきではないか。	小澤委員	第3回
高齢者や地域に住む人たちが学校教育にもコミットしていくという形をつくらなければいけない。地域と協力していい生徒を育て上げるというようなスキルが必要。	白幡（洋）委員	第3回
小規模であっても、地域と連携しながら、元気のある学校づくりをやっているところもある。そうした学校の在り方も模索すべき。	高橋委員	第1回
地域から支持される高校になることが第一に必要。地域の子供達からあこがれの眼差しをもって、その学校に入りたいというような学校づくりをすることが大事。	小澤委員	第1回
地域愛の醸成みたいな話があるといいのかなど。宮城県で学び、出て行っても、いずれは宮城県に戻ってきたいというふうな人がぜひ増えてほしい。	西山委員	第3回
適正配置、小規模校の再編はやむを得ない面もあるが、公教育の役割として一律に再編は乱暴である。高校の存在は地域によっては、歴史があり、地域のシンボリックな存在である。住宅政策、企業誘致など、まちづくりの根幹に関わる重要な問題であり、県土づくり全体に関わる問題である。	井口委員	第5回
企業誘致とあわせて、住民誘致をしていかなければいけない。	白幡（洋）委員	第3回
住民誘致という視点でも、魅力的な教育環境づくりは重要である。	白幡（洋）委員	第5回
地域社会との連携は非常に重要だと思っているが、特に仙台近郊の高校は、かなりの部分が地域外の生徒であり、地域との関わりは希薄な状況。	井口委員	第3回
父兄は当事者で子どもあずけている関係もあり、冷静で忌憚のない意見が出せるかどうかともわからないので、地域の経営者であったり、さまざまな立場、幅広い年代の具体的な意見を聞きながら進めると、早速行動できるのではないか。	阿部委員	第2回
高校教員の問題意識、やらされ改革になっていないか、地域と高校との関わり、改編後の校舎の活用状況、何が問題になっているのか等々、他県の状況分析が参考になるのではないか。	本図委員	第5回
公立の高校だからこそ、リスクを負いながらも特色を持って地域に生きるような学校ができるのではないか。そういう意味で県内全体のバランスをとりながら、地域における小規模校や特色ある学校の存続や改善をして、よい学校にするようなそういう方向も打ち出していく必要がある。生徒減少イコール統合廃止ではないという方向性を示すべき。	高橋委員	第3回
高卒の離職率が高いというのが話題になる。学校だけの問題ではなく、家庭の問題でもあると思う。	阿部委員	第1回
地域との連携を深めるために、学校公開を積極的に進めるべきだと思う。	阿部委員	第2回
高校教育の状況を保護者ではなく県民に十分に発信されていないのではないか。	井口委員	第4回
宮城県は大学がたくさんあるので、高校と県内大学との連携はこれから欠かせないと思う。大学との連携を踏まえながらカリキュラムを考える必要がある。	渡辺委員	第4回
必ずしも進学だけを考えて高校にいくわけではないので、中高大の一つの流れの中で、社会の人材を活用しながら幅広く育てていく必要があるのではないか。	白幡（勝）委員	第2回
いくら学習しても応用力を身に付けていないと、社会に出てから役に立たないことから、インターンシップで職場体験をしたり、いろいろなイベントに参加協力するなど、応用力を身に付ける活動を積極的にすることが重要だと思う。	渡辺委員	第3回
職場体験は応用力を考える上でも、非常に必要だと思う。そういうことは積極的にカリキュラムの中に入れていく必要がある。	渡辺委員	第4回
ソニーセミコンダクタや東北リコーなど地域の企業を高校教育に取り込んでいくようなことも。	西山委員	第5回

学校経営について

発言要旨	発言委員名	審議会
少子化、全県一学区で二極化し、学校格差が拡大するのではないか。経営的に成り立たない高校が何校か出てくる。	猪股委員	第1回
進学したい生徒は切磋琢磨できるいい高校を志望し、スポーツで活躍したい生徒は環境のいい高校を目指すと思うので、学区制をなくしたことで生徒の集中が起こるような気がする。そこにどう歯止めをしていくかが県教委の腕の見せ所だと思う。	猪股委員	第5回
全県一学区の実施により現在の高校の勢力図が激変すると思われる中で、平成32年には3,000名の子供たちが減ることに目を向けながら、高校の在り方を考える必要がある。	公平委員	第4回
小規模校を統合していくとしても4学級規模の学校が残り、教員の配置が不足し、指導に支障がでる。配慮が必要である。	白幡（勝）委員	第5回
評議員ということで学校公開に呼ばれたが、非常に敷居が高いと正直感じた。学校側も積極的にこの人からの意見をいただきたいと選び出してまでも呼んで意見を聞き取るような努力をするべき	阿部委員	第2回
父兄は当事者で子どもあずけている関係もあり、冷静で忌憚のない意見が出せるかどうかもわからないので、地域の経営者であったり、さまざまな立場、幅広い年代の具体的な意見を聞きながら進めると、早速行動できるのではないかな。	阿部委員	第2回
地域との連携を深めるために、学校公開を積極的に進めるべきだと思う。	阿部委員	第2回
高校教育の状況を保護者ではなく県民に十分に発信されていないのではないかな。	井口委員	第4回
高校側からの積極的な発信というのは非常に少ないのではないかな。もっと積極的に情報を発信することが重要ではないかな。	井口委員	第3回
教材開発をした教員にインセンティブを与えたりとか、教員の教材開発のコンテストを行うといった観点からのアクションプランの議論も必要ではないかな。	西山委員	第2回
学校教育の改善、教育環境の充実の安全管理体制に、先生方の男子生徒あるいは女子生徒への対応研修を加えてはどうか。	木村委員	第3回
生徒による授業評価は適正に検証されているのか。	西山委員	第2回
楽しい学校づくりのために、体当たりで生徒に接するような得意分野を持った先生を採用して欲しい。	木村委員	第4回
拠点校は心配ないが、それ以外の高校の特色づくりが問題なのではないかな。	佐々木委員	第5回